

日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由： 上級中国人学習者，上級韓国人学習者，日本語母語話者の作文の比較から

著者	布施 悠子，石黒 圭
雑誌名	国立国語研究所論集
号	15
ページ	17-42
発行年	2018-07
URL	http://doi.org/10.15084/00001594

日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由

——上級中国人学習者、上級韓国人学習者、日本語母語話者の作文の比較から——

布施悠子^a 石黒 圭^b

^a 国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 非常勤研究員

^b 国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域

要旨

本研究は、日本語学習者が作文を執筆する際に、なぜ修正するのかという自己修正の理由を明らかにすることを目的に、中国語、韓国語を母語とする上級日本語学習者、および日本語母語話者の大学生各 20 名がパソコンを用いて執筆した説明文、意見文、歴史文の 3 種、2,000 字程度の作文、計 180 本の執筆過程を分析した。分析の結果、まず、「修正の理由」の全体的な傾向として、日本語母語話者は、適切な表現の選定に重きを置き、文章全体の展開も見据えた修正を行っていた。一方、韓国人学習者は、既出の表現を豊かにすることを重視し、同時に文章の全体構成に意識を向けて修正していた。そして、中国人学習者は、入力操作や文法の間違いを直すために局所的な表現に着目して修正する傾向にあった。また、ジャンル別に「修正の理由」の特徴を見たところ、日本語母語話者は説明文、意見文、歴史文といったジャンルの影響を受けないのに対し、日本語学習者はいずれも書きにくいジャンルの影響を強く受けることがわかった。さらに、母語別に「修正の理由」の特徴を見たところ、日本語母語話者は、①節レベルでの表現の選択、②文の先の展開を考えた文入力途中での文法の修正、③先行文脈との対応を考えた前後の表現調整、④文章全体から後続の流れを考えた展開の変更といった特徴が見られ、韓国人学習者は、①読点の入力や削除による試行錯誤、②表現の豊饒化による意図の明確化、③文よりも大きい段落単位での修正といった特徴が見られた。そして、中国人学習者は、①句点に注目した調整、②語句単位の短い表現に対する修正、③既出の文内の述語にあわせた係り受けの修正、④文単位での修飾や移動の修正といった特徴が見られた*。

キーワード：作文、執筆プロセス、自己修正、修正理由

1. はじめに

従来の作文執筆の研究は、テキスト自体に偏りがちであった。作文という産出されたテキストがあるため、産出結果を目に見える形で分析することが容易であったからである。国内の研究、とくに日本語教育学における研究では、第二言語習得の過程における誤用研究を中心に、こうした研究が顕著であった（迫田（2002）、奥野（2005）など）。その後、日本語学習者の作文執筆過程の研究も行われるようになった。発話思考法によって作文執筆時の意識を分析するもの（衣川

* 本研究は国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（プロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果を報告したものである。また、本稿は第 10 回日本語実用言語学国際学会（ICPLJ10）（2017 年 7 月 8 日、9 日、於：国立国語研究所）、および、シンポジウム「新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—」（2018 年 1 月 14 日、於：国立国語研究所）での発表内容をもとに作成したものである。発表当日に有益なコメントをくださった皆様、修正にあたり適切なアドバイスをくださった査読者、JCK 作文コーパスの代表責任者の金井勇人氏、執筆システム作成者の新城直樹氏、分析のもととなるデータのタグ付けにご尽力くださった安川修氏、筒井千絵氏、鈴木靖代氏、田中啓行氏、富田史恵氏に感謝申し上げます。

(1995)、石橋 (2000) など) や、Hayes and Flower (1980) の文章産出モデルをもとにして目標設定や構想までを含めて考察したもの (衣川 (2000) など) があり、我々に大きな知見を与えてくれる。

しかし、実際、日本語学習者が書いているその瞬間に間違いに気づき、別の表現が適切だと思いい、論理展開を変更するとき、頭の中でどのような思考過程を経て修正を行ったのか、上記のような分析のみで解明することは難しい。なぜなら、執筆と同時に考えたことを後からインタビューで聞き出すことは、真の意味でいままさに進行中 (オンライン) の思考過程の解明とはいえないからである。100%には及ばないにせよ、加筆、削除、変更、移動といった日本語学習者が執筆した軌跡をすべて記録しておくことが、思考過程の解明の一助となるであろう。

また、日本語学習者が執筆する作文は、近年パソコンが主な執筆媒体となりつつある。パソコンでの執筆過程は、内容の削除や変更、移動などの修正をしたいと執筆者が思った場合、文字を入力するのと同じキーボード上で行われる。そのため、消しゴムなど別の道具を用いる手書きの執筆過程での修正とは「修正の理由」が異なると考えられる。よって、パソコンでの執筆過程の実態解明は、手書きの執筆過程とは別の対象として分析する必要があると思われる。そのうえ、パソコンのキーボード入力のログを記録しておけば、執筆時の記録操作を蓄積することが可能となる。記録操作を詳細に見ていくことで、何をどのようになぜ修正したのかという予測ができ、学習者の自己訂正の実態を明らかにする手がかりが得られるであろう。

現在、作文執筆過程の線条的な流れに沿って、執筆時の言語操作に特化して分析した研究は、日本語母語話者を対象としたものはあるが (細谷 (2003)、工藤・岡田・チェン (2015) など)、本研究のように日本語学習者を対象としたものは管見の限りない。また、日本語学習者を対象とし、パソコンでの執筆過程を分析したものに、石毛 (2016) があるが、思考段階やリソース活用段階も含めた作文執筆の行動面に着目した分析であり、作文を執筆しているまさにその時点で行われた修正について実態を解明しようとする本研究とは、目的を異とする。

そして、本研究に先駆けて、田中・石黒 (2018) では、作文執筆過程での「修正の位置」と「修正の種類」について分析し、オンラインでの作文の執筆過程での日本語学習者の実態解明に寄与している。当該研究と合わせ、本研究において、作文を執筆しているまさにそのときに、なぜ韓国人や中国人の日本語学習者が作文を修正したかという「修正の理由」について詳しく検討、分析していくことは、日本語学習者の作文執筆過程での自己修正の特徴の全体像を明らかにする一助となる。また、本研究の結果により、学習者の背景によって「修正の理由」に差異が見られれば、日本語教師に対し、学習者への指導方法の示唆を与えることも可能だと思われる。

そこで、本研究では、パソコンのキーボードの入力過程を記録できる、ブラウザ上のシステムを用いて、日本語学習者の作文執筆過程の実態を明らかにすることを目的とする。その中でも、とくに、日本語学習者が執筆過程の中でなぜその修正を行ったかという言語操作に着目して分析を行い、日本語学習者が自ら行った執筆過程から、予測可能な「修正の理由」についてその実態を明らかにすることを旨とする。

2. 先行研究の外観と本研究の位置づけ

日本語教育の分野で文章産出過程、作文執筆過程を対象とした研究は、発話思考法を用いた研究が中心であった。発話思考法とは「課題遂行中の心的反応をその場で声に出させる」(石橋 2012: 23) 方法である。衣川 (1997), 石橋 (1997, 1998, 2002), 副田 (2000), 石毛 (2010, 2011a, 2011b, 2012, 2014) は、発話思考法を用いて、日本語学習者の作文執筆過程における第一言語使用について分析している。また、Uzawa and Cumming (1989) は、発話思考法を用いて、中級日本語学習者の文章産出ストラテジーについて分析している。ここから、発話思考法は執筆過程において「どのように考えていたか」という心理状況を振り返ることにより、学習者の執筆の思考を理解することができることがわかる。しかし、本研究のように、執筆過程の最中になぜ修正を行ったかという、オンラインでの自己修正の理由を真に明らかにできてはいない。

一方、パソコンを用いた作文の執筆過程を分析したものとしては先述の石毛 (2016) がある。本研究と同じく、日本語学習者が作文をキーボードで入力して執筆する際の執筆過程を対象としたものである。また、作文執筆中の言語操作に特化した日本語教育以外の研究として、細谷 (2003) では、日本語母語話者の大学院生を対象に、ワードプロセッサを用いて作文を執筆した際の執筆過程を分析している。入力中のワードプロセッサの画面をビデオで録画し、修正数や修正箇所について検討している。しかし、いずれの研究も、分析観点が手書きによる執筆過程との比較であること、少数の執筆者を対象とした質的な研究であることから、パソコンでの作文の執筆過程の傾向を探るまでには至っていない。

同じく他分野において、工藤・岡田・チェン (2015) では、推敲を「作家が文章表現の彫琢やよりふさわしい内容への変更を目的に、既に書いたテキストに対して、語・句・文などを消したり新たに加えたりする行為」(p. 575) とし、Type Trace というソフトを用いて、三島賞作家の舞城王太郎の作品執筆における推敲を分析している。執筆者がプロの作家である点で本研究とは趣を異にするものの、分析対象が執筆者の執筆過程である点では本研究と類似している。しかし、いったん最後まで書き終わった文章を見直し、修正することを推敲とし、そこに限って分析をしている点で本研究とは異なる。この点を、衣川 (2000) を参考に検討してみたい。衣川 (2000) では、Hayes and Flower (1980) の文章産出モデルをもとにし、目標設定や構想まで含めて考察している。その中で、文章産出過程の特徴を巨視的な視点で把握するための概念として、「構想の過程」「文章化の過程」「見直しの過程」からなる文章産出過程を提案し、この三つの過程の生起分布の特徴から学習者の文章産出スタイルを探っている (衣川 2000: 17)。確かに、作文の執筆者は、実際に書きながら、かつ一度書いた文章も振り返りながら修正を行っており、その意味で、衣川 (2000) のいう「文章化の過程」と「見直しの過程」の両段階にわたって「修正の理由」が表れると考えるのが穏当であろう。そこで、本研究では、「見直しの過程」における推敲のみならず、修正全般がオンラインの執筆過程でどのように表れているかを探ることとし、工藤・岡田・チェン (2015) より広い範囲で「修正の理由」の表れる範囲を探った点が先行研究と異なる点である。

さらに、日本語学習者自身による修正の研究は、書き終わった作文を読み直す際の自己訂正に

関するものが多い。小宮（1991）は、学習者に自己訂正をする能力があることを指摘し、その能力を生かした指導について述べている。また、宮瀬（2002）では、別の留學生が執筆した作文に対して対象者である留學生が推敲を行う際の推敲方略について分析し、日本語運用能力が高まることによって、用いる推敲方略の種類が増えていくことを明らかにしている。そして、西川（2009）は教師が指摘したフィードバックに対する中国人学習者の作文の自己訂正とその困難点の実態を、西川（2012）では韓国人学習者の作文の自己訂正とその困難点の実態について論じている。結果として、中国人および韓国人学習者は指摘された誤用の半数以上を正しく訂正することができ、一定の自己訂正能力を持っていることがわかった。また、自己訂正の実態を分析した結果、対象とした日本語学習者にとってまだ処理が難しい誤用の言語的特徴のいくつかを記述することができたという。これらの先行研究から、学習者の自己訂正の実態解明の示唆が得られるが、小宮（1991）は先述の発話思考法を用いた読み直しの自己訂正に関する研究であり、宮瀬（2002）は他者の作文を訂正するという、より客観的な視点からの訂正能力を測った研究である。また、西川（2009, 2012）は教師が間違いを指摘した箇所への学習者の気づきに対する研究である。本研究では、作文の執筆者自身がオンラインで執筆しているまさにそのときに、どのような理由で修正を行っているかを分析することにより、執筆と同時進行に行われる自己訂正の実態を明らかにしたい。

また、作文の自己推敲の実態について論じたものに劉（2009）がある。劉（2009）では中国人学習者の説明的文章の論理展開の自己推敲において、論理展開に関する推敲の傾向について量的分析を行い、かつ論理展開に関する推敲が見られた具体例の質的分析を行った。量的分析の結果、推敲後の文章量が増えていること、「表面的推敲」が多いこと、「情報の調整」と「標識と配列の調整」が一定の割合（7：3）になっていることがわかったという。学習者の自己推敲を量的な観点で測定した点は、我々に中国人学習者の執筆傾向について知見を与えてくれるが、この分析対象は手書きの作文を教師がパソコンで入力しなおしたものをふり返る形をとっている。本研究のように、日本語学習者自身がパソコンで書いた作文に対し、キーボード上で自己修正を行っている場合、修正方法が消しゴム等を用いる手書きとは異なり、執筆しつつ同時に修正が行われる場合もあると考えられる。その点で、書き終えた段階での修正だけでなく執筆過程と平行して行われた修正も自己修正に含めて分析していく必要があると捉え、本研究ではこの観点を取り入れて分析する。

最後に、本研究の先駆けとなる田中・石黒（2018）は、オンラインで執筆された作文に対し、日本語母語話者、および中国語、韓国語を母語とする日本語学習者が行った「修正の位置」と「修正の種類」について分析を行ったものである。その結果、日本語母語話者は、入力中の先頭部の文節だけでなくその文節を含む文の範囲を考慮に入れながら修正を行い、複数箇所の修正を連続で行うことが少なく、中国人学習者は、入力中の文の先頭部を中心に局部的に修正しながら執筆していき、韓国人学習者は、作文をある程度書き進めてから書き終わった段落を中心に修正し、複数箇所をつづけて修正することが多いことを明らかにしている。しかし、日本語母語話者や日本語学習者がなぜそのような修正を行ったのかという原因を分析するには至っていない。修正の

原因、つまりなぜ修正を行ったのかという日本語母語話者と日本語学習者の「修正の理由」の実態が明らかになれば、それぞれのオンラインでの執筆傾向を知ることができる。また、日本語学習者がパソコンを用いて日本語で作文を執筆する際の困難点を指摘することが可能となる。その点で、本研究は当該研究とは異なる示唆を日本語教育や日本語教師へ提供できるであろう。

以上、作文の執筆過程に関する先行研究と本研究との相違点を概観した。まとめると、本研究は、①分析対象が、日本語母語話者と日本語学習者のパソコンの入力過程の記録というオンラインの資料である点、②執筆過程と同時に進行する自己修正と、書き上げた段階での自己修正の両方を修正の過程として捉える点、③執筆者が自ら行った「修正の理由」に着目し、執筆過程から予測可能な「修正の理由」の傾向を明らかにしたうえで、学習者の執筆の困難点を分析する研究である点で、先行研究とは異なる。このような位置づけのもと、分析を進めていく。

3. 分析方法

本節では、本研究の分析資料、および、「修正の理由」のタグ付けの方法について述べる。

3.1 分析資料

本研究が分析対象とする資料は、学習者の作文執筆過程における「修正の位置」および「修正の種類」の分析を行った田中・石黒（2018）と同一である。そのため、本稿では分析資料の紹介は概要にとどめる。詳しくは田中・石黒（2018）を参照されたい。

まず、分析資料はJCK作文コーパス構築のために執筆された説明文（「自分の故郷について」）、意見文（「晩婚化の原因とその展望について」）、歴史文（「自分の趣味（昔から続けていること）」について）の3種の作文で、それぞれを日本語母語話者20名、中国語を母語とする日本語学習者20名、韓国語を母語とする日本語学習者20名¹が執筆している。執筆者はいずれも大学生で、作文の総数は180本になる。文章の結束性や文章全体の構成など、グローバルな執筆プロセスが見られるように、1本あたり2,000字以上書かなければならない設定となっている²。また、日本語母語話者は日本在住、韓国人、中国人学習者はいずれも母国の大学で日本語を学習しており、日本語能力試験N1合格者かN1相当の上級レベルの日本語能力を有している。

また、作文はパソコンのブラウザ上のシステムに入力する形で執筆された³。このシステムは、入力過程でEnterキー、Backspaceキー、Deleteキー、半角英数字のいずれかを押したり、切り取りや貼り付けの操作を行ったりすると、その時点でシステム上に入力されている文字列が記録されるようになっている⁴。その後、作文ごとに執筆開始から執筆終了までの間に記録された文

¹ 韓国人日本語学習者の作文には、執筆過程がうまく記録できていないものがあつたため、あらたに1名の大学生に3種の作文の執筆を依頼し、その執筆過程を収集した。そのため、JCK作文コーパスに収録されている作文とは異なる作文が種別ごとに1本、合計3本ある。

² 今回の作文執筆に使用したシステムは2,000字以上書かないと作文を登録できない仕様になっているため、2,000字未満の作文はなかった。

³ 本研究で使用した作文執筆のシステムは、琉球大学の新城直樹氏が作成したものである。

⁴ 切り取りや貼り付けについては、執筆者がシステムに入力した文字列を切り取って、文章中の別の場所に貼り付けることはできるが、外部のwebサイトなどの文字列を貼り付けることはできないようになっている。

字列を時系列にすべて縦に並べた Excel ファイルを作成し、タグ付け作業を行った。次の 3.2 節では、タグ付けの方法とタグの種類について述べる。

3.2 タグ付けの方法とタグの種類

本節では、「修正の理由」のタグ付けの方法とタグの種類について説明する。本研究のタグ付け作業を行った箇所は、先述の田中・石黒 (2018) と同じである。まず、タグ付けのために、JCK 作文コーパスのデータを Excel ファイルに置き換えた。次に、3.1 節で説明したとおり、Enter キーなどを押したり切り貼りを行ったりする操作が最初に行われた時点の文字列を特定し、その上下に隣り合っている行の文字列の内容の差異を見比べ、そこから判定者が予測可能な範囲で、どのような修正が行われたのかを特定した。タグ付け作業は、作文 1 本につき日本語母語話者 3 名で判定した。この特定作業を、180 本の作文すべてに行い、作文執筆の際に修正が行われた部分、約 25,000 箇所を特定した。

この「修正の理由」に関するタグ付けは、当初、石黒 (2015) の認定基準 2 系 9 類に基づき行っていた。しかし、実際にタグ付けをしてみると、石黒 (2015) の認定基準ではカバーしきれない「修正の理由」が表れたため、本稿の筆者 (布施, 石黒) および判定者である日本語母語話者 3 名の相談により、タグの分類をきめ細かく行い、再度タグ付け作業を行った。

以下、最終的な「修正の理由」のタグ 7 類 24 種について説明する。なお、本稿におけるタグの認定は、作文の執筆者自身が行った「修正の理由」の実態を明らかにするのが目的であったため、修正の結果、文法的もしくは意味的に正しくなったかどうかという「修正の質」については判断を行わなかった。そのため、文法や表記の誤りも含めて、作文の執筆者が入力したとおりに示す。また、本稿における作文の用例の下線は本稿の筆者によるものである。

(1) 入力操作の修正

- ① **誤入力修正**：執筆者がキーボードの打ち間違いに気づいたときの再入力による修正。

例) 【修正前】 そのことが、晩婚化 m p

【修正後】 そのことが、晩婚化の

⇒上記の例では m の左隣に n が、p の左隣に o があり、指が右に一つずれていたことに気づき、修正。

- ② **誤変換修正**：執筆者が意図していない表現に変換ソフトが変換したことに気づいたときの再入力による修正。

例) 【修正前】 宮崎剣は 47 都道府県の中で

【修正後】 宮崎県は 47 都道府県の中で

⇒「宮崎県」が「宮崎剣」と変換されていたことに気づき、修正。

③**文字バレット修正**：執筆者が変換ソフトの通常の変換で意図する表現を出せない場合、変換しやすい別の表現を経由して出したい文字を出し、それを利用して整える修正。

例)【修正前】 自分の利益を求めず、無理

【修正中】 自分の利益を求めず、無失礼

【修正後】 自分の利益を求めず、無礼な

⇒「無礼」という表現を出すため、変換しやすい「無理」と「失礼」を組み合わせて修正。

(2) 記号の修正

④**記号選択修正**：句点、読点、カッコ、スペースなどの記号を、執筆者がより適切と考えるものに変更、削除、追加する修正。

例)【修正前】 それは主に臨海部に位置している工場地帯とそれによる空気の汚染

【修正後】 それは主に臨海部に位置している工場地帯と、それによる空気の汚染

⇒既出の文に、読み返しの段階で読点を加え、並列構造を明確にした修正。

(3) 短い表現の修正（語句レベル）

⑤**語句選択修正**：文法的な問題はないが、執筆者が不適切だと考えた語彙的表現を、より適切だと思われるものに変更する修正。

例)【修正前】 初めて東京に来たときはその、スケールの大きさや満員電車の混雑、人の多さについてびっくりし、

【修正後】 初めて東京に来たときはその、スケールの大きさや満員電車の混雑、人の多さについて驚き、

⇒文体的な精度を高めるために、より適切と考える表現に言い換えた修正。

⑥**語句精緻化修正**：内容がより豊かになるように、具体的な表現を語句レベルで補足する修正。

例)【修正前】 さらにその区間の長さによる料金は全国の新幹線の中で一番安く、

【修正後】 さらにその区間の長さによる料金は 290 円で 全国の新幹線の中で一番安く、

⇒文の内容のイメージを膨らませるため、具体的な表現を補足した修正。

⑦**語句簡略化修正**：情報が過剰にならないように、既出の表現を語句レベルで削除して簡潔にする修正。

例)【修正前】 福島県福島市は福島県の県北地方に位置する人口約 30 万人の都市で、

【修正後】 福島県福島市は県北地方に位置する人口約 30 万人の都市で、

⇒既出の文から、重複が感じられる表現を削除し、簡潔にした修正。

(4) 長い表現の修正 (節レベル)

⑧**節選択修正**：不適切だと考えた表現を、より適切だと思われるものに変更する節レベルでの修正。

例) 【修正前】 それこそが彼の一番の「ムジン紀行」です。

【修正後】 それこそがキムスンオクさんの一番有名な作品でもある「ムジン紀行」です。

⇒文自体の意味は変えず、伝達の精度を増すために、より適切な表現に置き換えた修正。

⑨**節精緻化修正**：内容がより豊かになるように、具体的な節レベルの情報を補足する修正。

例) 【修正前】 キョンポデはキョンポにある湖を一望に眺めることができるあずま屋です。

【修正後】 キョンポデはカンルンの中にある大きいキョンポにある湖を一望に眺めることができるあずま屋です。

⇒既出の文に、イメージを膨らませるため、節レベルの具体的な情報を補足した修正。

⑩**節簡略化修正**：情報が過剰にならないように、既出の節レベルの表現を削除し、簡潔にする修正。

例) 【修正前】 他国の文化や生活などに初めて知って接しただけではなくこういうのもあったんだっていう新しい世界を見たような感じでした。

【修正後】 他国の文化や生活などに初めて知って新しい世界を見たような感じでした。

⇒既出の文から、過剰と判断した節レベルの表現を削除し、簡潔にした修正。

(5) 文法の修正

⑪**文法形式選択修正**：不適切だと判断した文法形式を、より適切だと思われるものに変更する修正。

例) 【修正前】 そして、この「晩婚化」の言葉は人間にだんだん知っている。

【修正後】 そして、この「晩婚化」の言葉は人間にだんだん知られる。

⇒既出の文を読み返し、文法的に不適切と考える表現を、適切と考えるものに置き換える修正。

⑫**係り受け修正**：すでに書かれた文の中で不適切だと思われる修飾、非修飾関係をより適切になるようにする修正。

例) 【修正前】 以前は大多数の女性学校を出てから数年働き

【修正後】 以前は大多数の女性が学校を出てから数年働き

⇒既出の文を読み返し、前後の修飾関係が不適切だと判断したものを適切なものに修正。

⑬**係り先修正**：書きかけた文をそのまま書きつづけると、そのあとに書く修飾先との関係が不適切になることを予測して、より適切になるようにする修正。

例)【修正前】 晩婚化が止まるというのはすなわち結婚年齢の

【修正後】 晩婚化が止まるというのはすなわち結婚をするか否かの境界に

【修飾先】 到達するということであり、

⇒書いている途中で、後続との修飾関係が不適切になることを予測し、入力部分で修正。

(6) 談話の修正 (文, 段落レベル)

⑭**文連結修正**：文章の流れを考えて、二つの文を一つの文につなぐ修正。

例)【修正前】 しかし、山の頂につく時、雄大で美しい山河を眺めるやいなや、熱と疲れを気がつかなかった。とても綺麗であった。

【修正後】 しかし、山の頂につく時、雄大で美しい山河を眺めるやいなや、熱と疲れを気がつかなくて、とても綺麗であった。

⇒内容は変えず、もともと二つの文だったものを一つの文にした修正。

⑮**文切断修正**：文章の流れを考えて、一つの文を二つの文に分ける修正。

例)【修正前】 绥芬河という町は私の故郷が黒龍江省の東南部に置っている小さい町だ。

【修正後】 绥芬河という町は私の故郷だ。黒龍江省の東南部に置っている小さい町だ。

⇒内容は変えず、もともと一つの文だったものを二つの文にした修正。

⑯**段落連結修正**：文章の流れを考えて、二つの段落を一つにつなぐ修正。

例)【修正後】 つまり、日本の晩婚化の激化の原因は結婚したくない若者が増えている訳ではなく、結婚したいんだけど結婚できない若者が増えている。
(連結) 近年以来日本は経済の不景気で、たくさん非公式な社員が出現する。彼らは生活に窮するので、いつも Working Poor と形容される。

⇒もともと二つの段落だったものを、一つの段落につなげた修正。

⑰**段落切断修正**：文章の流れを考えて、一つの段落を二つに分ける修正。

例)【修正後】 刀削麺は一番有名ではありまでんけど、味がよくて、市民に愛されます。
(切断)

鶏西の風景は言葉で説明できないほどきれいで、皆さんも機会があれば

ば、ぜひ遊びに来てください。

⇒もともと一つの段落だったものを、二つの段落に分けた修正。

- ⑱**先行文脈対応修正**：すでに書かれた先行文脈と後続文脈の関係を考慮して、両者の関係がより適切になるようにする談話レベルでの修正。

例) 【修正前】 薩摩切子は価格的に高価なものが多いのですが、生産が開始された時代のことなどに思いをはせつつ、お酒などをあじわってみるものもなかなかいいと思います。そしてこれを可能にするのが、これから紹介する焼酎です。

【修正後】 薩摩切子は価格的に高価なものが多いのですが、生産が開始された時代のことなどに思いをはせつつ、お猪口などでお酒などをあじわってみるものもなかなかいいと思います。そしてこれを可能にするのが、これから紹介する焼酎です。

⇒「これ」という後続文脈の指示詞が示している内容を明らかにした修正。

- ⑲**先行文脈精緻化修正**：すでに書かれた先行文脈と後続文脈の関係を考慮して、先行文脈の内容がより豊かになるように、新たな文や段落を挿入する修正。

例) 【修正前】 私は、神奈川県の北部、川崎市というところで育ちました。他所で生活している方のなかには、川崎という町についてあまりよい印象を持っていないという人も少なからずいるだろうと思います。それは主に臨海部に位置している工場地帯と、それによる空気の汚染からくるものでしょう。

【修正後】 私は、神奈川県の北部、川崎市というところで育ちました。川崎市の人口は約143万人で、市のほとんどが住宅地で占められており、都心部や横浜に勤める人々にとってのベッドタウンとして発展しています。また、京浜工業地帯の中心に位置し、多くの工場を抱える工業都市でもあります。他所で生活している方のなかには、川崎という町についてあまりよい印象を持っていないという人も少なからずいるだろうと思います。それは主に臨海部に位置している工場地帯と、それによる空気の汚染からくるものでしょう。

⇒先行文脈に新たな文を複数挿入し、具体的な説明を追加した修正。

- ⑳**先行文脈簡略化修正**：情報が過剰にならないように、先行文脈の文や段落を削除し、内容を簡潔にする修正。

例) 【修正前】 アメリカでは、様々なメディアから独身のほうが楽だという意見が言われている。ある作家は、我々は今まで結婚を賛美してきたのかもしれない。

れないというテーマで本を出して大きな反響を呼んだこともある。また、このような現象は欧米だけでなく東アジアなどでも現れ、多くの国で結婚する年齢が増加している。このように、現在、多くの国で晩婚化が進んでいる。

晩婚化というのは、一般的に婚期を過ぎてする結婚をすることである。

【修正後】 アメリカでは、様々なメディアから独身のほうが楽だという意見が言われている。ある作家は、我々は今まで結婚を賛美してきたのかもしれないというテーマで本を出して大きな反響を呼んだこともある。また、このような現象は欧米だけでなく東アジアなどでも現れ、多くの国で結婚する年齢が増加している。(削除)

晩婚化というのは、一般的に婚期を過ぎてする結婚をすることである。

⇒先行文脈の一文を削除し、文章を簡潔にした修正。

②**先行文脈移動修正**：文章全体の構成を考えて、カット&ペーストで文、段落の位置を移す修正。

例) 【修正前】 秋に行った、また紅葉見もできます。そしてその「川に漂流」という刺激なレクリエーション項目はとても人気があります。風景区に近いところに「柳河ダム」があります。

【修正後】 秋に行った、また紅葉見もできます。そして風景区に近いところに「柳河ダム」があります。その「川に漂流」という刺激なレクリエーション項目はとても人気があります。

⇒文章自体は変えず、一つの文を別の箇所にかット&ペーストし、順序を変えた修正。

②**後続文脈方向修正**：書きかけた内容をそのまま書きつづけると、不適切な展開になることを予測して、執筆計画を変更し、新たな方向で書き出す修正。

例) 【修正前】 阿武隈川という一級河川がある。福島県を縦貫し北へ流れ、宮城県へと延びる。私の家から約5分、

【修正後】 阿武隈川という一級河川がある。福島県を縦貫し北へ流れ、宮城県へと延びる。この巨大な川に福島市内で注ぎ込む小さな川が、摺上(すりかみ)川だ。

⇒もともとは「阿武隈川」の説明をする流れだった文章を、「摺上川」の説明に書く内容を変更した修正。

(7) 特殊な修正

③**統一修正**：表記の統一など、一箇所を変更したことに伴い、その変更で文章全体を統一するために、一括して変更を行う修正。

例) 【修正前】 また、もう一つの難関はリズムについていけなかったことであった。
(別段落)

鏡に向かって、自分の動作を確認しながら練習していた。

【修正後】 また、もう一つの難関はリズムについていけなかったのである。
(別段落)

鏡に向かって、自分の動作を確認しながら練習していたのである。

⇒既出の文を読み返し、文章全体から特定の部分を一括して変更した修正。

④復元修正：不適切な表現だといったんは判断したものの、元の表現のほうがよいと考え、元に戻す修正。

例) 【修正前】 また、ゴヤンシは首都のソウルとも港があるインチョンともついているので方向を少しだけ変えて進むだけでも1時間程度で海と大都市の雰囲気全てを感じられます。有名な遺跡といえば

【修正中】 また、ゴヤンシは首都のソウルとも港があるインチョンともついているので方向を少しだけ変えて進むだけでも1時間程度で海と大都市の雰囲気全てを感じられます。(削除)

【修正後】 また、ゴヤンシは首都のソウルとも港があるインチョンともついているので方向を少しだけ変えて進むだけでも1時間程度で海と大都市の雰囲気全てを感じられます。有名な遺跡といえば

⇒書いた内容を一度すべて消し、元の内容を復元する形で書き直す修正。

以上のタグ付けの方法とタグの種類を用いて分析した結果を、次の4節で述べる。

4. 分析結果と考察

4.1 「修正の理由」の全体的な傾向

本節では「修正の理由」の全体的な傾向について述べる。表1は、日本語母語話者、中国人学習者、韓国人学習者の「修正の理由」を7類に大別し、タグの実数を集計した結果である。この各タグの実数に差があるか、統計解析を行った（以降、本研究の統計解析には、R Ver.3.4.3を用いた）。

表1 「修正の理由」のタグ実数

	(1)入力操作	(2)記号	(3)短い表現	(4)長い表現	(5)文法	(6)談話	(7)特殊
日本人	1,773	310	1,838	681	1,031	463	411
韓国人	2,583	466	2,134	767	1,134	1,071	847
中国人	3,007	431	1,666	399	1,169	530	632

表1に対してカイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった ($\chi^2=621.71, df=12, p<.01$)。そこで、どのタグ間に統計的に有意な差があるかを測るため、残差分析を行った。その調整済み標準化残差の結果を表2に挙げる。

表2において統計的に有意差が表れたタグについて検討する。まず、(1)「入力操作の修正」について、中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者および韓国人学習者が有意に少ないことがわかった。次の(3)「短い表現の修正」について、統計的に日本語母語話者が有意に多く、中国人学習者が有意に少なかった。(4)「長い表現の修正」についても、統計的に日本語母語話者と韓国人学習者が有意に多く、中国人学習者は有意に少なかった。つづく(5)「文法の修正」に関しては、日本語母語話者および中国人学習者が有意に多い一方、韓国人学習者は有意に少なかった。そして、(6)「談話の修正」に関しては、韓国人学習者が有意に多い一方、中国人学習者および日本語母語話者が有意に少なかった。最後に、(7)「特殊な修正」に関しては、韓国人学習者が有意に多く、日本語母語話者が有意に少なかった。

表2 表1の調整済み標準化残差

	(1) 入力操作	(2) 記号	(3) 短い表現	(4) 長い表現	(5) 文法	(6) 談話	(7) 特殊
日本人	-8.779**	-1.744	9.085**	8.984**	4.240**	-5.777**	-6.199**
韓国人	-7.422**	0.032	-1.264	2.726**	-5.831**	13.027**	5.824**
中国人	15.987**	1.623	-7.323**	-11.341**	1.985**	-7.943**	-0.116

(** $p<.01$)

「修正の理由」のタグ別の詳細な結果については4.3節以降に譲るが、以上の結果から推察できる全体的な傾向をまとめると、日本語母語話者は入力操作や談話レベルでの修正が少なく、表現の長さを問わず表現に関する修正を多く行う傾向にあった。また、韓国人学習者については、入力操作や文法の修正が相対的に少ないが、長い表現や談話レベルといった大きい単位の修正に注意が向いていた。一方、同じ学習者でも中国人学習者は、入力操作や文法に関する修正が多く、表現や談話に関する修正を比較的行わない傾向が表れた。中国人学習者はより小さい単位の修正の着眼点があることがうかがえ、田中・石黒(2018)で指摘されている結果と同様の傾向が見られた⁵。

4.2 ジャンル別の傾向

次に、文章のジャンル別での「修正の理由」の傾向について検討する。次頁の表3に日本語母語話者のジャンル別のタグの実数を挙げる。

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連がないことがわかった ($\chi^2=11.875, df=12, p=0.45$)。日本語母語話者にとって、とくにジャンルによって執筆過程に困難が

⁵ 「修正の理由」の実数が、田中・石黒(2018)と異なるのは、タグ付けの際に、前後の行を見比べて検討した結果、執筆過程で何度か悩みながら修正したものと捉え、複数個所の修正をまとめて一つの「修正の理由」と捉えたほうがいと、判定者3名で判断したためである。

生じるわけではなく、執筆過程で気づいた段階で自己修正を行っているように思われる。

表3 日本語母語話者ジャンル別「修正の理由」のタグ実数

	(1) 入力操作	(2) 記号	(3) 短い表現	(4) 長い表現	(5) 文法	(6) 談話	(7) 特殊
説明文	674	117	686	270	396	160	147
意見文	543	89	601	227	329	165	134
歴史文	556	104	551	184	306	138	130

つづいて、表4に韓国人学習者のジャンル別のタグの実数を挙げる。カイ二乗検定を行った結果、各タグの実数の差には統計的に有意な関連があることがわかった ($\chi^2=57.479, df=12, p<.01$)。

そこで、各タグの有意差の傾向を見るため、残差分析を行った。調整済み標準化残差の結果を表5に示す。

表4 韓国人学習者ジャンル別「修正の理由」のタグ実数

	(1) 入力操作	(2) 記号	(3) 短い表現	(4) 長い表現	(5) 文法	(6) 談話	(7) 特殊
説明文	903	133	721	227	368	283	293
意見文	876	149	700	250	370	414	238
歴史文	804	184	713	290	396	374	316

表5 表4の調整済み標準化残差

	(1) 入力操作	(2) 記号	(3) 短い表現	(4) 長い表現	(5) 文法	(6) 談話	(7) 特殊
説明文	3.126**	-1.886	1.423	-1.811	-0.057	-4.542**	1.349
意見文	0.794	-0.620	-0.550	-0.429	-0.508	3.968**	-3.370**
歴史文	-3.876**	2.479*	-0.858	2.215*	0.561	0.543	2.016*

(* $p<.05$, ** $p<.01$)

表5から、ジャンル別に韓国人学習者の修正の傾向を見ると、統計的に説明文は(1)「入力操作の修正」が有意に多く、(6)「談話の修正」が有意に少なかった。意見文は(6)「談話の修正」が有意に多く、(7)「特殊な修正」が有意に少なかった。また、歴史文は(2)「記号の修正」、(4)「長い表現の修正」、(7)「特殊な修正」が有意に多く、(1)「入力操作の修正」が有意に少なかった。

ここから推察できるジャンル別の「修正の理由」の傾向として、韓国人学習者にとって、説明文は韓国国内の紹介が求められるため、韓国固有の地名や文化を日本語で紹介することに困難を覚えているようである。また、事実を列挙する文が多くなるため、談話レベルでは、文を調整する必要が少なかったように思われる。一方、歴史文は自分の趣味について語るテーマであり、好きなことに対する単語をよく使っているため入力操作の修正が必要ないぶん、より記述的、表現的な修正に目が行きやすい様子がうかがえた。また、意見文は、文章の全体構成が問題になりやすく、談話レベルという自分の言いたいことをまとめた単位で修正しやすい傾向があった。

つづいて、次頁の表6に中国人学習者のジャンル別のタグの実数を挙げる。

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった

($\chi^2=94.906$, $df=12$, $p<.01$)。そのため、各タグの残差分析を行い、結果として、表7の調整済み標準化残差が得られた。

表6 中国人学習者ジャンル別「修正の理由」のタグ実数

	(1) 入力操作	(2) 記号	(3) 短い表現	(4) 長い表現	(5) 文法	(6) 談話	(7) 特殊
説明文	1,239	176	635	133	433	234	314
意見文	1,006	130	453	123	359	152	172
歴史文	762	125	578	143	377	144	146

表7 表6の調整済み標準化残差

	(1) 入力操作	(2) 記号	(3) 短い表現	(4) 長い表現	(5) 文法	(6) 談話	(7) 特殊
説明文	1.161	0.195	-2.131*	-2.948**	-2.529*	1.828	4.967**
意見文	4.372**	-0.190	-3.376**	0.114	0.111	-0.979	-1.910
歴史文	-5.693**	-0.018	5.729**	3.071**	2.621**	-0.982	-3.430**

(* $p<.05$, ** $p<.01$)

表7から、ジャンル別に中国人学習者の修正の傾向を見ていくと、説明文は、(7)「特殊な修正」が統計的に有意に多く、(3)「短い表現の修正」、(4)「長い表現の修正」、(5)「文法の修正」が有意に少なかった。意見文は、(1)「入力操作の修正」が有意に多く、(3)「短い表現の修正」が有意に少なかった。また、歴史文は、(3)「短い表現の修正」、(4)「長い表現の修正」、(5)「文法の修正」が有意に多く、(1)「入力操作の修正」、(7)「特殊な修正」が有意に少なかった。

ここから推察できるジャンル別の「修正の理由」の傾向として、中国人学習者にとって、説明文は自身の出身地を説明する際、地域名や名所や名物など固有名詞が漢字で示されるため、それほど修正する必要がなく、表現に迷っても元の表現を復元して使う傾向にあるようである。一方、意見文は中国人学習者にとって、身近ではない書き慣れない内容であるため、入力操作に戸惑う語彙や表現が多いジャンルである可能性がある。また、歴史文は、先述のとおり自分の趣味について書くものであるため、入力操作に戸惑わず、好きなことに対してより具体的にかつ文法的に間違わずに表現したいという意識が働く傾向にあるのではないかと思われる。

以上、ジャンル別の学習者の「修正の理由」の傾向から、韓国人学習者は、説明文のような固有名詞や描写のための語彙や表現に修正を多く行い、中国人学習者は、日本語の漢字という共通点が少ない感情や感覚などの語彙や表現を何度も修正していた。そのため、語彙や表現については、ジャンル別の執筆の困難さに着目し、指導することが必要になるだろう。

4.3 「修正の理由」のタグごとの特徴

本節では、「修正の理由」のタグについて、執筆者の属性によって、どのような傾向が表れるのかを明らかにするため、タグの実数を日本語母語話者、韓国人学習者、中国人学習者の別に集計し、その結果を分析した。以下、先述のタグの種別7類に沿って論じていく。

4.3.1 「入力操作の修正」の特徴

以下の表8は、(1)「入力操作の修正」について対象者ごとにタグの実数を集計した結果である。

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった($\chi^2=78.871, df=4, p<.01$)。そこで、各タグ間の有意差を測るため残差分析を行い、得られた調整済み標準化残差の結果を表9に示す。

表8 (1)「入力操作の修正」のタグ実数

	①誤入力	②誤変換	③パレット
日本人	1,098	661	14
韓国人	1,556	980	37
中国人	1,887	996	124

表9 表8の調整済み標準化残差

	①誤入力	②誤変換	③パレット
日本人	0.171	1.430	-5.043**
韓国人	-1.661	2.919**	-3.888**
中国人	1.463	-4.075**	8.160**

(** $p<.01$)

まず、①「誤入力修正」について、統計的な有意差が見られなかった。次に、②「誤変換修正」については、統計的に韓国人学習者が有意に多く、中国人学習者が有意に少なかった。また、③「文字パレット修正」について、統計的に中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者および韓国人学習者が有意に少なかった。

ここから考えられることとして、①「誤入力修正」は、パソコンのキーボード上の操作ミスから生まれたものであり、手書きより早いスピードでキーボードを打っているがゆえ、タイピングミスは母語を問わず起こりうるものである。そのため、作文執筆の際、人間は一定の割合で入力操作の間違いをする可能性があると考えられる。

一方、②「誤変換修正」は、変換ソフトの変換性能や学習機能の精度によって、意図した文字ではないものが表れることは少なくない。大事なことは誤変換に気づく能力である。その点で、韓国人学習者が用いたキーボードは日本語バージョンとは異なる可能性が高く、変換ソフトの違いからも操作ミスが生まれやすかったため、そこから間違いに気づき、②「誤変換修正」を多用したと推察される。韓国人学習者の誤変換に気づく能力は高く評価すべきだが、日本語のキーボードや変換性能に慣れさせる訓練も授業内で必要になるであろう。一方、中国人学習者はタグの実数が多いにもかかわらず、誤変換に気づけなかったことが少なくなかったと推察される。中国人学習者に対して、教師は日本語と共通である漢字に依存させず、しっかり適切な表記を習得し、変換の性能に依らない正しい語を選び抜く能力を身に付けさせるような指導に心掛けたい。

そして、③「文字パレット修正」は中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者および韓国人学習者が有意に少ない。③「文字パレット修正」は、パソコンのコピー&ペーストの機能を最大限に活かし、既知の語彙を組み合わせて、入力したい語彙を導き出す過程である。漢字という母語で共有する文字を活用しようとする中国人学習者ならではの「修正の理由」の特徴であり、中国人学習者がオンラインで執筆する際に身に付けたストラテジーとして高く評価すべきであろう。韓国人学習者にもこのストラテジーは有効であると考えられるため、先述のキーボードの操作と合わせて身に付けさせたい技能であると思われる。

4.3.2 「記号の修正」の特徴

次に、(2)「記号の修正」(タグ付けの項目でいうと④「記号選択修正」)について、対象者ごとにタグの実数を集計した結果を表 10 に挙げる。なお、記号の種類をより詳細に分析するため、下位分類として、句点、読点、カッコ、スペースのタグを設けた。

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった($\chi^2=146.97, df=6, p<.01$)。その調整済み標準化残差の結果を表 11 に示す。

表 10 (2)「記号の修正 (④「記号選択修正」)」のタグ実数

	句点	読点	カッコ	スペース
日本人	9	233	46	22
韓国人	15	311	62	78
中国人	92	199	51	89

表 11 表 10 の調整済み標準化残差

	句点	読点	カッコ	スペース
日本人	-4.648**	5.711**	1.006	-4.812**
韓国人	-5.975**	2.934**	0.107	0.818
中国人	10.309**	-8.189**	-1.026	3.556**

(** $p<.01$)

残差分析の結果、「句点の修正」は統計的に中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者および韓国人学習者が有意に少ないことがわかった。一方、「読点の修正」は日本語母語話者および韓国人学習者が有意に多く、中国人学習者が有意に少なかった。「カッコの修正」については、対象者による有意差は見られなかった。また、「スペースの修正」は中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者が有意に少ない結果となった。

句点の操作の特徴として、岩崎 (2018) では、同じ JCK 作文コーパスを用いた分析において、中国人学習者の作文において半数近い執筆者に句点を打つべきところに読点を使用する誤りが見られ、その数が 170 例に上ることが指摘されている。ここからも、中国人学習者にとっては日本語の句点の操作が難しく、悩みぬいて何度も修正を行った可能性が高いと考えられる。中国人学習者にとっては、文という単位が自明でないということを前提にした指導が必要であろう。

また、読点の操作の特徴に関しては、岩崎 (2016) が上述の JCK 作文コーパスを用いた分析において、韓国人学習者の読点の使用がもっとも少なく、次に日本語母語話者、もっとも多いのが中国人学習者であることを指摘している。読点の使用がもっとも少ない韓国人学習者に読点の修正がもっとも多いのは一見意外であるが、韓国語の場合、分かち書きを行い、読点は日本語以上に控える傾向があるため、読点のルールが明確に規定されていない日本語の文章を書く場合、韓国人学習者はどこに打つか、かなり慎重になるように見受けられる。むしろ、母語で読点とカンマを併用し、セミコロンやコロンを用いることもある中国人学習者のほうが、読点については深く吟味せずに多用し、強調したいところ全般に読点を打つ傾向があると考えられる。

そして、スペースの操作の有意差について、日本語は分かち書きを行わないかわりに、句読点や漢字、ひらがな、カタカナの多様性から語の単位を判断していく。一方、中国語も分かち書きがない反面、文字の種別による判別や句読点のルールも日本語と異なる。そのため、ある語や表現を目立たせるもしくは区別するために、スペースを入れることで表記的にコントロールしたのではないかと推察される。

句読点などの記号の指導は、日本語教育においてあまり重要視されていない。岩崎（2018）や本研究の結果から考えると、句読点の打ち方のルールを日本語の授業に盛り込むことは有力な指導方法である。できあがった文章の読みやすさや文内の意味のまとまりを調節できる記号である句読点やカッコやスペースは、指導内容に含める価値がある項目であると思われる。

4.3.3 「表現の修正」の特徴

つづいて、表現の修正について、対象者ごとにタグの実数を集計した結果を以下の表 12 に挙げる。なお、表現の長さによる特徴を比較分析するため、(3)「短い表現の修正」と(4)「長い表現の修正」の集計結果を併記した。

表 12 (3)「短い表現の修正」と(4)「長い表現の修正」のタグ実数

	(3) 短い表現			(4) 長い表現		
	⑤語句選択	⑥語句精緻化	⑦語句簡略化	⑧節選択	⑨節精緻化	⑩節簡略化
日本人	936	629	273	317	293	71
韓国人	1,031	816	287	282	423	62
中国人	883	561	222	156	195	48

表 13 表 12 の調整済み標準化残差

	(3) 短い表現			(4) 長い表現		
	⑤語句選択	⑥語句精緻化	⑦語句簡略化	⑧節選択	⑨節精緻化	⑩節簡略化
日本人	0.392	-1.481	1.485	3.790**	-4.138**	0.692
韓国人	-2.622**	3.253**	-0.714	-3.028**	4.221**	-2.091*
中国人	2.384*	-1.937	-0.767	-0.817	-0.204	1.692

(* $p < .05$, ** $p < .01$)

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった(短い表現: $\chi^2=12.946$, $df=4$, $p=.011$, 長い表現: $\chi^2=24.215$, $df=4$, $p<.01$)。次に、どのタグの間に統計的な有意差があるかを測るため、残差分析を行い、上掲の表 13 の調整済み標準化残差が得られた。

結果として、(3)「短い表現の修正」の⑤「語句選択修正」は統計的に中国人学習者が有意に多く、韓国人学習者が有意に少なかった。⑥「語句精緻化修正」は韓国人学習者が有意に多かった。また、⑦「語句簡略化修正」については統計的な有意差は見られなかった。一方、(4)「長い表現の修正」の⑧「節選択修正」は統計的に日本語母語話者が有意に多く、韓国人学習者が有意に少なかった。

⑨「節精緻化修正」は統計的に韓国人学習者が有意に多く、日本語母語話者が有意に少なかった。また、⑩「節簡略化修正」は韓国人学習者が有意に少ないという結果になった。

ここから、日本語母語話者は、より長い単位で一文の表現を見渡し、既出の文に表現を埋め込んで表現を豊かに修飾するのではなく、適切な表現を探すために修正を行う傾向があることがうかがえる。また、韓国人学習者は、語句や節を選んだり削除するのではなく、既出の文の中で表現をいかに豊かにしていくかということに着眼点があることが見受けられる。一方、中国人学習者は、語句の選択を行うことで、部分的に修正を行う傾向があることがうかがえる。これは西川(2009)で、中国人学習者は語彙の選択の自己訂正が比較的容易であると述べられていることと重なり、西川(2012)で、韓国人学習者は語彙の選択を自己訂正するのが難しい場合が少なくないと述べられていることと同様である。よって、中国語の場合、上級の漢語的語彙や表現が増えると、日本語の漢語の語義と近くなり、表現の選択が容易になる一方、韓国語は基本の語に表現を追加して説明していくほうが適切な語を選択するよりも容易になる可能性が示唆される。

確かに、表現を豊かにすることは、上級の学習者だからこそできるようになったある種の回避ストラテジーであるが、日本語母語話者のように端的な表現を選び出すスキルも当然必要となる。ここでも、日本語で上級の語彙や表現に慣れ、的確に選択することをトレーニングする必要性があることが看取できる。

4.3.4 「文法の修正」の特徴

(5)「文法の修正」について、対象者ごとにタグの実数を集計した結果を表14に挙げる。

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった($\chi^2=12.946, df=4, p=.011$)。その調整済み標準化残差の結果を表15に示す。

表14 (5)「文法の修正」のタグ実数

	①形式選択	②係り受け	③係り先
日本人	386	155	490
韓国人	450	269	415
中国人	507	353	309

表15 表14の調整済み標準化残差

	①形式選択	②係り受け	③係り先
日本人	-2.239*	-7.558**	8.923**
韓国人	-0.507	0.408	0.158
中国人	2.672**	6.916**	-8.800**

(* $p < .05$, ** $p < .01$)

結果として、統計的に①「文法形式選択修正」と②「係り受け修正」は、中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者が有意に少ないことがわかった。一方、③「係り先修正」は統計的に日本語母語話者が有意に多く、中国人学習者が有意に少なかった。

西川(2009)でも指摘されているように、実際中国人学習者にとって、正しい文法を選択することはかなり難しいことなのであろう。韓国語は日本語と同じ膠着語に属するSOV型の言語であり、文法上近い表現もあるが、孤立語でありSVO型の中国語の場合、日本語の正しい文法形式を選択することは困難であると思われる。なお、①「文法形式選択修正」の下位分類として中国人学習者が修正を多く行っていたのを見てみると、助詞とアスペクト、ボイスといった、母

語の中国語にない、もしくは同じ用法ではない文法形式であった。この結果は、西川（2009）の結果と同様の傾向がある。中国人学習者は上級レベルに到達しても、基本的な助詞の選択、アスペクトやボイスといった中国語との違いが大きい文法に関しては、いまだ難しいようである。そのため、何度も修正を繰り返した結果、修正が多くなってしまったと思われる。よって、教師からある程度積極的に誤用訂正の箇所について指摘をし、適切な文法形式を選択する基準を意識的に習得させ、本人が将来自分で文法の間違いに気づくことができるようにしていく指導が重要であることが示唆される。

一方、⑬「係り先修正」と⑭「係り受け修正」とは日本語母語話者と中国人学習者が正反対の結果となった。この点は、母語での文の拡張方向の違いが影響を与えていると考えられる。日本語は、文が後方の述語に向かって拡張し、句点が打たれるまで述語に係る要素の長さをいくらでも延長し、また、そうしてできる節をいくつでも重ねていくことができる。しかし、中国語はSVO型の孤立語で、文頭付近で文の骨格をあらかじめ決めなければならない、述語を重ねていくことにも限界がある。その結果、日本語母語話者は母語の語順から文末へと意識が向きやすく、文の作成途中で節末や文末を思い浮かべつつ、そこに係っていく文法形式を現在入力中の先頭部で調整する⑬「係り先修正」が多くなったと考えられる。反対に、中国人学習者は、節末や文末の述語を書いた段階で初めて、すでに文字化された先行要素との文法的な対応関係を確認しながら調整していくほうが母語の語順に適っているため、⑭「係り受け修正」が多くなったと推察される。今回は統計的には有意差が出なかったものの、先述のとおり韓国語も日本語と同じ膠着語である。そのため、中国人学習者と韓国語学習者の母語の語順の違いを意識し、文拡張に対する方向性の違いを取り入れた指導方法の構築も重要な課題となるだろう。

4.3.5 「談話の修正」の特徴

(6)「談話の修正」について、対象者ごとにタグの実数を集計した結果を表16に挙げる。

カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった($\chi^2=275.13, df=16, p<.01$)。その調整済み標準化残差の結果を表17に示す。

表16 (6)「談話の修正」のタグ実数

	⑭文 連結	⑮文 切断	⑯段落 連結	⑰段落 切断	⑱文脈 対応	⑲文脈 精緻化	⑳文脈 簡略化	㉑文脈 移動	㉒後続 方向
日本人	19	41	12	40	75	159	29	10	78
韓国人	37	109	186	160	103	336	42	59	39
中国人	35	39	32	46	16	223	35	57	47

表17 表16の調整済み標準化残差

	⑭文 連結	⑮文 切断	⑯段落 連結	⑰段落 切断	⑱文脈 対応	⑲文脈 精緻化	⑳文脈 簡略化	㉑文脈 移動	㉒後続 方向
日本人	-0.313	-0.215	-5.512**	-2.044*	4.772**	-0.163	1.071	-3.435**	6.795**
韓国人	-1.487	1.104	6.101**	2.863**	0.233	-1.894	-1.753	-0.789	-4.997**
中国人	2.406*	-1.368	-3.521**	-2.160*	-4.791**	2.845**	1.491	4.333**	0.753

(* $p<.05$, ** $p<.01$)

結果として、⑭「文連結修正」は統計的に中国人学習者が有意に多かった。また、⑯「段落連結修正」と⑰「段落切断修正」は統計的に韓国人学習者が有意に多く、日本語母語話者および中国人学習者が有意に少なかった。⑱「先行文脈対応修正」は統計的に日本語母語話者が有意に多く、中国人学習者が有意に少なかった。そして、⑲「先行文脈精緻化修正」は中国人学習者が有意に多かった。⑳「先行文脈移動修正」は統計的に中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者が有意に少なかった。また、㉑「後続文脈方向修正」は日本語母語話者が有意に多く、韓国人学習者が有意に少なかった。

ここから考えられる特徴として、まず、韓国人学習者は⑯「段落連結修正」と⑰「段落切断修正」により、段落を操作して文章の構成を調整している様子が見える。ただし、このことは、段落という単位をどのように扱うべきか、明確な基準を持ちえないことの裏返しでもあり、読点と同様、韓国人学習者が恣意性の高い区切り符号に手を焼いていると見ることもできる。

また、中国人学習者は、⑭「文連結修正」、⑲「先行文脈精緻化修正」、㉑「先行文脈移動修正」など、文を単位とした表現の付加や正しい位置への修正が多く行われていた。ただし、⑯「段落連結修正」、⑰「段落切断修正」、⑱「先行文脈対応修正」は日本語母語話者や韓国人学習者に比べて少なく、より大きい単位での作文の自己訂正や、指示詞や接続詞を用いた結束性、意味的な一貫性といった文脈の連続性にまでは意識が届きにくい様子が見える。文より広い範囲の自己訂正に視野が広がれば、構造を意識した作文執筆も可能となり、全体像を捉えながら執筆できるようになるだろう。

一方、日本語母語話者は、⑱「先行文脈対応修正」や㉑「後続文脈方向修正」を比較的高い割合で行っていた。⑱「先行文脈対応修正」は文章の内容自体は修正せずに、指示詞や接続詞などが有効に機能するように前後の文脈を円滑にするもの、㉑「後続文脈方向修正」はこれから書く予定であった執筆プランを大きく変更し、後続文脈の軌道修正を図るものである。これに対して㉑「先行文脈移動修正」はあまり用いていない。これはいずれも、文章全体の文脈の流れとして捉えるものであり、日本語母語話者は前後の文脈のつながりを大事にする傾向がある。なお、⑭「文連結修正」や⑮「文切断修正」、⑯の「段落連結修正」や⑰「段落切断修正」などは少ない。母語話者として文や段落の単位の基準が明確である有利さが働いているように見受けられる。

以上から、日本語母語話者は文章全体を文脈の流れとして捉える傾向が強いのに対し、韓国人学習者は段落といった大きい単位に迷いつつも、それをベースに修正し、詳しく述べることを好み、中国人学習者は先行文脈をふり返りつつ、文を単位にした局所的な修正を行う傾向があることがわかる。こうした考察をとおして、作文執筆過程において、学習者が作文全体の構成や関係性を見渡ししながら部分を修正していくことの難しさがうかがえる。実際、日本語教育の場面では、語から文、文から段落、といった積み上げ式で文章を書き上げていくという流れで指導していくことが多い。だが、構成の枠組みを事前に指導し、それに沿って書かせてしまうと、ダイナミズムを失ったいわゆる「型にはまった定型文」の文章ができあがってしまう。そのため、上級の学習者の執筆過程において、全体と部分の双方を往還するような視点を醸成する訓練を行うことが必要となるであろう。これは、実際の文章を読んでいくと、日本語学習者のみならず、日本語母

語話者の一部にも必要な訓練であることがわかる。

4.3.6 特殊な修正の特徴

最後に、(7)「特殊な修正」に関して、対象者ごとにタグの実数を集計した結果を表 18 に挙げる。カイ二乗検定を行った結果、統計的に各タグの実数の差には有意な関連があることがわかった ($\chi^2=92.522, df=2, p<.01$)。また、その調整済み標準化残差の結果を表 19 に示す。

表 18 (7)「特殊な修正」のタグ実数

	㉓統一	㉔復元
日本人	41	370
韓国人	212	635
中国人	128	186

表 19 表 18 の調整済み標準化残差

	㉓統一	㉔復元
日本人	-7.851**	7.851**
韓国人	0.793	-0.793
中国人	7.640**	-7.640**

(** $p<.01$)

表 19 から、㉓「統一修正」は、統計的に中国人学習者が有意に多く、日本語母語話者が有意に少ない結果となった。中国人学習者は一度書き上げた文章を再度見直し、各修正箇所を調整していく傾向にあり、日本語母語話者は、執筆過程の中で適宜自己修正しながら、ふり返らずに文末まで書き進めていけるようである。この点は、4.3.5 節で言及した、学習者の執筆過程の中の自己修正の難しさに起因していると推察される。

一方、㉔「復元修正」は、日本語母語話者が統計的に有意に多く、中国人学習者が有意に少ない。つまり、日本語母語話者は、一度書いたものを直し、悩んだ末、また元の表現に戻すという作業を頻繁に行っている。日本語母語話者の場合、執筆の先頭部で適宜自己修正しながら、適切な表現を選択する過程で、最初にした表現を再度選択している様子が見えがえる。つまり、最適な表現を探して類義の表現を思い浮かべ、比較検討した結果、元の表現に戻ることが多く見られるという点で、4.3.3 節「表現の修正」の特徴の延長線上であるように思われる。

5. まとめ

本研究では、オンラインでの作文の執筆過程の記録を用いて、日本語母語話者と日本語学習者の「修正の理由」の特徴をそのタグの実数から分析した。

その結果、全体的な傾向として、日本語母語話者は入力操作や談話レベルでの修正が少なく、表現の長さを問わず表現に関する修正を多く行っていた。また、韓国人学習者については、入力操作や文法の修正を相対的に多く行わず、長い表現や談話レベルといった大きい単位の修正に注意が向いていた。一方、同じ学習者でも中国人学習者は、入力操作や文法に関する修正が多く、表現や談話に関する修正を行わない傾向が表れ、中国人学習者はより小さい単位の修正の着眼点があることがうかがえた。

次に、ジャンル別の「修正の理由」については、日本語母語話者はジャンルによる執筆の違いが見られなかった。また、韓国人学習者のジャンル別の傾向は、自身の出身地を説明する際、固

有名詞や描写のための語彙や表現に修正が比較的多く、中国人学習者は、自分の趣味を執筆する際、日本語の漢字という共通点が少ない感情や感覚などの語彙や表現を何度も修正していた。そのため、語彙や表現の指導も、母語による得意不得意によってジャンル別に重きを変え、指導することが必要になることが示唆された。

対象者別に「修正の理由」の詳細な特徴を見ていくと、(1)「入力操作の修正」に関しては、韓国人学習者の②「誤変換修正」と中国人学習者の③「文字パレット修正」が目立った。どちらも間違いではなく、学習者が自分の知識やストラテジーをフル活用して行った修正であると考えられる。韓国人学習者、中国人学習者がお互いの足りない部分を補うために学びたい点である。

つづいて、(2)「記号の修正」に関しては、韓国人学習者が読点の修正を多用し、中国人学習者が句点の修正を多用していた。これはすなわち、韓国人学習者が読点に、中国人学習者が句点にそれぞれ困難点を抱えていることに結びつく。母語での句読点の使用の影響がその背景にあると考えられ、再度句読点の打ち方のルールについて、日本語の授業に取り入れる必要性が示唆された。

また、(3)「短い表現の修正」と(4)の「長い表現の修正」では、日本語母語話者は、より長い単位で一文の表現を見渡し、既出の文に表現を埋め込んで表現を豊かに修飾するのではなく、正しい表現を探すために修正を行う傾向があることがうかがえる。一方、中国人学習者は、語句の選択を多く行う傾向にあり、これは日本語と母語の共通点である漢字の存在が影響しているように思われる。また、韓国人学習者は、語句や節を選んだり削除したりするのではなく、既出の文の中で表現をいかに豊かにしていくかということに着眼点がある様子が観察された。これは、韓国人学習者の作文の自己訂正における表現選択の難しさを指摘した西川(2012)と軌を一にし、表現を選択するのではなく、表現を詳しく豊かにすることで自身の意図に近づけていくストラテジーであるように見受けられた。日本語教育においては、表現の豊かさを評価する一方で、上級学習者らしい適切な語彙や表現を的確に使用できる指導の必要性も示唆された。

そして、(5)「文法の修正」では、中国人学習者が日本語との文法概念の大きな相違から、正しい文法形式の選択が困難であるため、何度も修正を行っていたと考えられる。これは、中国人学習者が作文の自己訂正において文法の修正が難しいことを指摘した西川(2009)と同様の結果となり、上級レベルでも文法形式の選択について教師から誤用訂正のフィードバックが必要であることがうかがえる。また、母語での文の拡張方向の違いから、中国人学習者は一文内の係り受けを調整する修正を多用し、日本語母語話者は母語の語順から文末へと意識が向きやすく、文の作成途中で節末や文末に係っていく文法形式を現在入力中の先頭部で調整する修正を多用していた。日本語教育の中で、文の拡張方向についても考慮して指導していく必要性が示唆された。

(6)「談話の修正」では、文章の捉え方の違いが明らかな結果の差となって表れていた。日本語母語話者は文章全体を文脈の流れとして捉える傾向が強く、先行文脈と後続文脈の関係を重視して修正を行っており、韓国人学習者は段落という単位に悩みつつも、段落で文章構成を考える傾向があった。また、長く詳しく述べることを好む志向も談話レベルでも見られた。一方、中国人学習者は文単位の局所的な修正に目が向きやすく、修飾や構成も文単位で多く行っていた。文

や段落といった単位を意識するあまり、「型にはまった定型文」に陥らぬよう、学習者の執筆過程では、全体と部分の双方を往還するような視点を醸成する訓練を行うことが求められる。

最後に、(7)「特殊な修正」では、中国人学習者が文章をある程度書き終えた後、まとめて一括して修正を行っていた。学習者は執筆過程の中で自己修正を行うことが難しいと推察される。一方、日本語母語話者は、一度書いたものを直し、悩んだ末、また元の表現に戻すという作業を頻繁に行っており、日本語母語話者の場合、執筆の先頭部で適宜自己修正しながら、正しい表現を選択する過程で、最初に書いた表現を再度選択している傾向にあるように思われた。

以上の点が明らかになった一方、今後の課題も残った。まず、今回は修正を行った結果が修正をする前より良くなったかという「修正の質」までは分析できなかった。自己訂正において「修正の質」が上がりにくいことがわかれば、自己訂正ではない修正の方法を日本語教育へ提言できるため、さらなる追究が求められる点であろう。また、韓国人学習者がなぜ修正を重ねることを好むのか、韓国人、中国人学習者の作文修正時にどのような意識が働くのかについては、本研究では明らかにできなかった。両学習者へのインタビューを行い、作文の自己修正に対するピリーフなどの調査も望まれよう。今後の課題としたい。

参考文献

- Hayes, John R. and Linda S. Flower (1980) Identifying the organization of writing processes. In: Lee W. Gregg and Erwin R. Steinberg (eds.) *Cognitive processes in writing*, 3-30. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 細谷由理子 (2003) 「ワードプロセッサによる文章産出過程の特徴—手書きとの差異に着目して—」『人文科教育研究』30: 33-47.
- 石橋玲子 (1997) 「第1言語使用が第2言語の作文に及ぼす効果：文の流暢性と複雑さの観点から」『言語文化と日本語教育』13: 67-77.
- 石橋玲子 (1998) 「発話プロトコル法による日本語学習者の作文産出過程の分析—第一言語の関わりからの観点から—」『言語文化と日本語教育』16: 12-22.
- 石橋玲子 (2000) 「日本語学習者の作文におけるモニター能力—産出作文の自己訂正から—」『日本語教育』106: 56-65.
- 石橋玲子 (2002) 『第2言語習得における第1言語の関与』東京：風間書房.
- 石橋玲子 (2012) 『第2言語による作文産出の認知心理学的研究』東京：風間書房.
- 石毛順子 (2010) 「『第二言語作文のプロセスモデルの構築』パイロット調査報告」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』2: 84-89.
- 石毛順子 (2011a) 「英語または韓国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程—母語使用の観点から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3: 1-8.
- 石毛順子 (2011b) 「英語・韓国語・中国語を母語とする中級日本語学習者の作文過程—母語使用の観点から—」『留学生教育』16: 81-87.
- 石毛順子 (2012) 『第二言語習得における作文教育の意義と特殊性』東京：風間書房.
- 石毛順子 (2014) 「英語・韓国語・中国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程—母語使用の観点から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』6: 75-83.
- 石毛順子 (2016) 「中国語を母語とする日本語学習者におけるパーソナルコンピューターでの作文過程—手書きによる作文過程との比較から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8: 19-27.
- 石黒圭 (2015) 「母語話者・学習者の作文執筆プロセスにおける修正の諸相」第56回 NINJAL コロキウム講演資料, 2015年2月17日, 於：国立国語研究所.
- 岩崎拓也 (2016) 「中国人・韓国人日本語学習者の作文に見られる句読点の多寡」『一橋日本語教育研究』4: 187-196.
- 岩崎拓也 (2018) 「正確で自然な読点の打ち方」〈新たな作文研究のアプローチ—わかりやすく書ける作文シラバス構築を目指して—〉シンポジウム発表資料, 2018年1月14日, 於：国立国語研究所.

- 衣川隆生 (1995) 「大学院留学生はどのように文章を書き上げているか—効率的書き手と非効率的書き手の文章産出過程の特徴」『JALT Journal』17(2): 197-212.
- 衣川隆生 (1997) 「作文の課題によってどのように文章産出過程が変わるか」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12: 89-104.
- 衣川隆生 (2000) 「日本語を第二言語とする書き手の文章産出研究の枠組みの提案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15: 13-24.
- 小宮千鶴子 (1991) 「推敲による作文指導の可能性—学習者の能力を生かした訂正」『日本語教育』75: 124-135.
- 工藤彰・岡田猛・チェン, ドミニク (2015) 「リアルタイムの創作情報に基づいた作家の執筆スタイルと推敲過程の分析」『認知科学』22(4): 573-590.
- 劉偉 (2009) 「中国人日本語学習者の説明的文章の論理展開に関する自己推敲の調査, 分析」『専門日本語教育』11: 31-38.
- 宮瀬真理 (2002) 「留学生の作文推敲方略：推敲の単位の観点から」『日本語・日本文化』28: 51-78.
- 西川寿美 (2009) 「中国人日本語学習者の作文における自己訂正— treatable errors と untreatable errors の観点から—」『学苑』819: 10-19.
- 西川寿美 (2012) 「韓国人日本語学習者の作文における自己訂正」『学苑』857: 24-33.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究』東京：風間書房.
- 追田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』東京：アルク.
- 副田恵理子 (2000) 「文章産出過程における母語使用の分析—発話思考法を用いて—」『北海道大学留学生センター紀要』4: 81-101.
- 田中啓行・石黒圭 (2018) 「日本語学習者の作文執筆修正過程—中国人学習者と韓国人学習者の修正の位置と種類の分析から—」『国立国語研究所論集』14: 255-276.
- Uzawa, Kozue and Alister Cumming (1989) Writing strategies in Japanese as a foreign language: Lowering or keeping up the standards. *The Canadian Modern Language Review* 46(1): 178-194.

関連 Web サイト

『JCK 作文コーパス』(研究代表者: 金井勇人) <http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/> (2018年1月10日確認)

The Intention of Self-Revision in JSL Learners' Writing Process: A Comparison between Native Japanese Speakers and Advanced Chinese and Korean JSL Learners

FUSE Yuko^a ISHIGURO Kei^b

^aAdjunct Researcher, JSL Research Division, Research Department, NINJAL

^bJSL Research Division, Research Department, NINJAL

Abstract

To understand why university students learning Japanese self-revise their writing, this study analyzed their writing process in 2000-character-long essays by recording presses of the enter key and the delete key. The revisions were graded according to intention based on this record. A total of 180 essays were analyzed. The essays were categorized according to style (explanatory, opinionative, or historical) and the nationality of the students (20 Chinese, 20 Korean, and 20 native Japanese speakers). The native speakers tended to focus on selecting appropriate expressions and expanding at the sentence level, the Korean students tended to emphasize enriching existing expressions and corrected themselves with regard to the overall composition of sentences, and the Chinese students tended to focus on local expressions in order to correct mistakes in input and grammar. The native speakers' revisions consisted of (1) selecting expressions at the clause level, (2) correcting grammar in the middle of a sentence while expanding the preceding sentence, (3) adjusting expressions in light of the preceding context, and (4) revising wording based on the flow of the entire sentence. The Korean students' revisions comprised (1) trial and error due to input and deletion, (2) clarification of intent by expanding expressions, and (3) correction by paragraph units. Finally, the Chinese students' revisions were characterized by (1) adjustment of phrases, (2) revision of short expressions, (3) revision according to predicate dependency, and (4) revision and movement of sentences.

Key words: writing, writing process, self-revision, intention of revision